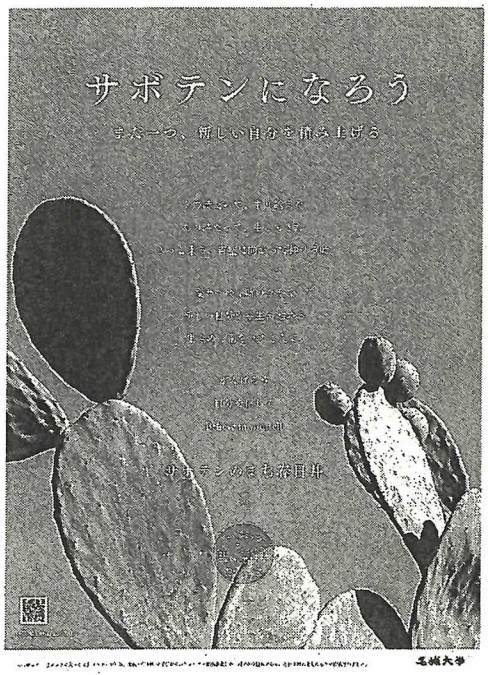
学校法人名城大学　メディア掲載情報　2020年7月6日付

朝日新聞（夕刊）
7 社会 4版　2020年（令和2年）7月3日（金）

コロナ禍「サボテンになろう」

謎めいたポスターだ。新型コロナウイルスで活気を失いがちな社会への「応援」として、名城大農学部の研究室などが作製したもので、青空をバックにサボテンが高らかにこう呼びかける。「サボテンになろう」。そこにはサボテンの生命力への称賛とともに、60年以上前の台風被害による「物語」が重ね合わせられている。

名古屋市天白区の名城大のキャンパス。学内でもサボテンのポスターが掲示され、学生が眺めていた。ポスター作製を発案し、学生らとメッセージなどを考えたのは、農学部の植物機能科学研究室の近藤歩・准教授（植物生理学）。近藤さんは、ウチワサボテンの品種「ノパル」に由来し、サボテンを通じて愛知県春日井市の地域活性化などに取り組むプロジェクト「ノパルノ研究室」を運営。ポスターもプロジェクトの一環で、サボテンに重ね合わせた思いを熱く語る。



新型コロナウイルスで苦しむ社会への応援ポスター「サボテンになろう」＝近藤歩・名城大准教授提供

ある日 街に貼られたポスター

「耐えようとか、我慢しようではなく、厳しい環境の中でもサボテンのように変化を受け入れ、乗り越えていこうということです。新たにゼロから作り上げるのはしんどいが、今まで積み上げたものの上に、ポンと上積みする感じだと、また生きていけるかなと思うんです」

厳しい直射日光や荒野の土ぼこりなど、過酷な自然環境の中でも適応し、生き抜いていくというサボテン。サボテンが持つ粘り強さや生命力の強さに魅力を感じ、近藤さんはこの数年、サボテンの研究に取り組んでいる。サボテンの姿に、コロナ禍の社会に生きる人々を重ね合わせ、応援メッセージのポスター作製を思いついたという。

名城大の研究室「生きてきた力信じて」

ポスターに使ったサボテンは、凛（りん）とした姿のウチワサボテンだ。「丸い茎節の上に新たな茎節が伸びていく。これまで培ってきたものの上に、積みあがっていくイメージで、自分が生きてきた力を信じて乗り越えていこうと感じて欲しい」と狙いを語る。

ポスターを持つ名城大の近藤准教授と農学部の学生ら＝6月29日、名古屋市天白区

サボテンにはもう一つの意味あいも重ねている。「戦後最大の台風被害」とされ、5千人を超える犠牲者を出した1959年の伊勢湾台風とサボテンとの「物語」だ。リンゴや桃などを栽培していた春日井市の果樹農家は壊滅的な被害を受けた。これを契機に、それまで副業的に栽培していたサボテンをメインに切り替え、春日井市は国内有数のサボテンの産地となった。

過去には「全国一のサボテン生産」を記録。市によると、現在も少なくとも7戸のサボテン農家があり、市は「サボテンのまち」を掲げている。

伊勢湾台風乗り越えた春日井だから

農学部の付属農場が春日井市にあり、近藤さんも以前からサボテンによる街づくりに協力してきた。伊勢湾台風で苦境に立たされた農家の姿は「コロナ禍の厳しい環境で苦しむ今の社会に通じる」と指摘。新型コロナでの「新しい生活様式」を国が示す中、「苦しさを乗り越え、新たな変化を受け入れた春日井のストーリーは、コロナ時代を生き抜くためのメッセージになる」と訴える。

ポスターは春日井市の飲食店や公共施設などに掲示している。5日までは、JRの名古屋駅や鶴舞駅など、名古屋市内の駅でも貼り出している。

（岩尾真宏）

「サボテンのまち」をアピールするモニュメント。新型コロナウイルス感染拡大を受け、現在はマスク姿に＝6月29日、愛知県春日井市

・農学部：近藤歩准教授